

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 （ 教育学 ）	氏名	白銀 夏樹
学位授与の要件	学位規則第4条第1・②項該当		
論 文 題 目			
テオドール・W・アドルノの教育思想に関する研究			
論文審査担当者			
主 査	教 授	坂 越 正 樹	
審査委員	教 授	深 澤 広 明	
審査委員	教 授	丸 山 恭 司	
〔論文審査の要旨〕			
<p>本論文は、20世紀ドイツの思想家アドルノの教育思想を再構成し、啓蒙の批判的継承という観点からその特徴を明らかにしようとするものである。理性の導きによって理想的世界を実現しようとした18世紀の啓蒙思想は、同時にその実現の方途として教育の必然性を組み込んでいた。しかし今日の近代社会の閉塞状況に示されるように啓蒙への期待が失望に変わるに伴って、近代教育、教育学もまた批判にさらされ、人間形成という主題に立ち返って啓蒙と教育の関係を問い直すことが教育学の現代的課題となっている。</p> <p>本論文で注目するアドルノは、啓蒙を徹底的に批判した代表的な思想家でありながら、自らの知的活動を啓蒙と称し、さらに啓蒙思想の諸概念を継承した教育論を提示している。本研究は、一見相対立するアドルノの教育論と啓蒙批判を読み解き、彼の哲学、美学、社会学を含む思想全体と関係づけることによって、アドルノ教育思想を再構成しようとするものでもある。</p> <p>序章で部分的なアドルノ理解に陥りがちな先行研究を批判し、本論文の研究課題を提示した後、第一章では、アドルノの来歴から教育者としての姿を確認している。アドルノはナチス支配期にユダヤ系出自のためアメリカへ亡命し、戦後になってドイツの民主化に関与していく。特に1966年論文「アウシュヴィッツ以後の教育」では、「教育に対して最も優先して求められるのは、アウシュヴィッツが二度とあってはならないこと」であると教育の意義を強調している。</p> <p>第二章では、アウシュヴィッツの「野蛮」を繰り返さないためのアドルノの社会心理学的考察が解明されている。アドルノによれば、アウシュヴィッツは権威に縛られやすく操作されやすい「脆弱な自我」が引き起こしたものであり、それは合理化した今日の社会の帰結でもある。学校でもルールの強制やコントロール、暴力的上下関係といった自我の脆弱化の契機が多く存在し、これらの「野蛮」を回避するための教育実践が求められるべきであるとする。</p> <p>第三章では、アドルノが教育の理念とする自律について、その内実が明らかにされている。アドルノの求める自律は近代啓蒙思想がめざした普遍的理想的な人間の姿ではなく、他律的な社会の枠組みの中にしかありえずそこに根ざした営為として捉えられる。自律と</p>			

は、社会的現状を批判しながらそれとは無縁でいられない自己を反省し、現状の外部を志向することにほかならないとされる。

第四章では、アドルノが自律の営為における現状と自己の意識化と呼ぶ経験の概念を検討し、教育への示唆を明らかにしている。アドルノにとって経験とは、日常においても思考においても透明な合理性が強制となった現状において、主体と客体との間で立ち上がる「不透明な間」、現状の中でその外部の可能性が感知されることであった。子どもの芸術経験にしばしば見られる「質的な飛躍」はそのモデルであり、大人は子どもの経験に輪郭を与えて子どもの経験能力を尊重する主体的な関係を構成しうるのである。

第五章では、人間形成における自律と経験の意味を自己形成の時間意識から解明している。アドルノにおいて自律と経験は日常に間欠的に介入する営為を示していた。しかし教育という観点からは、個々の営為が人間の成長ないし発達という時間の連続的な経過の中に位置づけられる必要がある。伝統的な *Bildung*（人間形成）概念は個人と社会全体の動的調和的発展を含意していたが、今やそれは成立しがたくなり、蓄積された断片的な自我の諸特性が社会への適応のために使用されるだけの事態になっている。このような静的時間意識に代わってアドルノが新たに提起するのは、完結した全体性を求めず過去と現在と未来とが重層的に関連し続ける時間意識である。現在における過去の想起から現状とは異なる未来への志向が個人的、社会的に喚起され、そこで個人の自己形成が社会との動的な関係を結びうるというアドルノの思想は、*Bildung* の現代的継承と見なされる。

結章では、アドルノの教育思想が啓蒙思想の批判的継承として特徴づけられることが確認される。18世紀啓蒙思想が理性の自己実現をめざしたにもかかわらず悪しき現状を招いたと批判するアドルノは、理性による支配が不要な「多様なものの共生」を理念とし、自由や連帯を肯定し、現状を批判し脱する契機として個人とその教育に期待した。アドルノの教育思想は伝統的啓蒙的教育観のように万人に普遍的に徹底を求めるものではなく、否定的現状を脱する契機として必要とされ、現状の外部を志向するために現状に積極的に介入する「抵抗の橋頭堡」とも見なされるものであったと結論づけられる。

以上本論文の意義は、次の点に認められる。(1)先行研究における「批判的・解放的教育論」的アドルノ像と、彼の思想全体からは矛盾して見える教育論を除外したアドルノ像の乖離を乗り越え、アドルノ教育思想としての特徴を明らかにしたこと、(2)近代啓蒙批判の代表的論者であるアドルノが啓蒙の批判的継承の道を提示する者でもあることを、遺稿集の調査解読を踏まえた自律や経験の概念の精査によって初めて明らかにしたこと、(3)アウシュヴィッツの「野蛮」を経験し閉塞しているかのような近代教育学に対して、アドルノに依拠しつつそれを繰り返さない教育の意義と可能性を示したこと、(4)これらの考察を通して、近代教育学の根本問題である啓蒙の限界点と展開可能性を提示しえたこと、さらに近代から現代に至るドイツ教育思想に新たな一つの連関的な流れを開削したことである。最終的に解明されたアドルノ教育思想の教育学的意義は、今日の教育哲学、教育思想研究の最先端に位置するものと高く評価できる。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（教育学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

平成 30年 10月 2日